- 1 会 議 名 総務文教委員会
- 2 日 時 平成25年11月20日(水) 10時00分開会
11時30分閉会
- 3 場 所 第2委員会室
- 4 出席委員 牟田学委員長、出口徹裕副委員長、仮屋園一徳委員、
牛之濱由美委員、岩崎健二委員、木下孝行委員、
山田勝委員、濱之上大成委員
- 5 委員外議員 松元薫久議員
- 6 事務局職員 議事係 牟田 昇 君
- 7 参 考 人 グリーンコープかごしま生活協同組合
阿久根地域委員長 小林 弥生 君
- 8 補 助 者 宍道紀代美 君
- 9 傍 聴 者 5名
- 10 会議に付した事件
- ・ 陳情第5号 川内原発1号機2号機の再稼働に反対し廃炉を
求める陳情書
 - ・ 陳情第6号 川内原発3号機増設白紙撤回を求める陳情書
 - ・ 陳情第7号 原子力発電推進から脱却し原子力に依存しない
自然エネルギー政策に転換を求める陳情書
 - ・ 陳情第8号 県民の安全が担保されない拙速な川内原発1・
2号機の再稼働を反対する意見書の提出を求め
る陳情書
- 11 議事の経過概要
別紙のとおり

審査の経過概要

総務文教委員長(牟田学委員)

ただいまから総務文教委員会を開会します。
ここでお諮りいたします。

陳情5号から7号の審査にあたり、陳情者を参考人として招致したいと思いますが、これに御異議ありませんか。

岩崎健二委員

9月25日の委員会で、委員長より呼びたいという申し出があり、その時点で、まだ早いんじゃないかということで、あとでしようということで決したと思います。その決したことで、まだだれを呼ぶか、いつ呼ぶかということも全く決めていない状況の中で、この会が開かれていることについては、手続上おかしいんじゃないかということでもありますので、きょうは、次の機会に、だれを呼ぶのか、呼ばないのかをまず審議をして、それでやめるべきだと思います。

総務文教委員長(牟田学委員)

ほかにありませんか。

山田勝委員

私はね、どういう陳情であってもね、そういう中で、本人たちもそのつもりできてるのにね、議会の都合で、事務局の不手際だとしてもですよ、議会の都合でわざわざ来ているところにね、帰れというのもだから、一応呼んで、出席していただいて、趣旨を聞くということぐらいいいのじゃないですか。

総務文教委員長(牟田学委員)

ほかにありませんか。

牛之濱由美委員

今、説明もいただいたんですけれども、まず、この参考人を呼ばれるという件も、委員長も携わっていらっしゃるのか、ちょっとお伺いしたいんですけれども。

総務文教委員長(牟田学委員)

この件についてはですね、私がこの陳情の参考人を呼んで話を聞き、そのあと九電のほうも呼んで話を聞きたいという思いは言っております。ただ、きょうの件に関しては私のほうも確認不足だったと。私の思いはそのように事務局には伝えておりました。

牛之濱由美委員

委員長のあれはよくわかりました。先ほど、岩崎委員のほうからもちょっと発言がありましたけれども、私も電話いただいたときに、あれ、決めてないよなという思いが真っ先にしました。先ほど山田委員のほうから議会側の不手際でということでしたけれども、やはりはじめとしてはしっかりした手続を踏んだうえで参考人を呼んでいただくという形が筋なのではないかなと思うんですけれども。

濱之上大成委員

私のほうとしては、結論から申し上げますと、参考人がおいでなので、私もまったく同じなんですけど、一応呼んで陳情の趣旨をお聞きして、そのあと私たちがじっくりと検討するというふうに切りかえたらどうですかね。

[「休憩にしてください」と呼ぶ者あり]

総務文教委員長(牟田学委員)

休憩とします。

(休憩 10:05 ~ 10:20)

総務文教委員長（牟田学委員）

休憩前に引き続き委員会を再開いたします。

○陳情第5号、第6号、第7号

総務文教委員長（牟田学委員）

本日は、先の第3回定例会で閉会中の継続審査となりました陳情第5号から、陳情第8号までの4件の審査を行います。

まず初めに、陳情第5号から陳情第7号までの3件を議題といたします。

ここでお諮りいたします。

陳情第5号から第7号までの審査にあたり、陳情者を参考人として招致したいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

御異議なしと認め、陳情者を参考人として呼ぶことに決しました。

ここでお諮りいたします。

出席を求めた参考人から補助者を同席させ、委員からの質疑内容によっては、補助者に答弁させたいとの申し出がありますが、これを許可することに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

御異議なしと認め、補助者の同席を許可することといたします。

また、審査は陳情第5号から7号まで、それぞれ参考人の意見を聞いてから、質疑を行いますのでよろしくお願いします。

（参考人、補助者及び傍聴者入室）

それでは、参考人の小林弥生さん、補助者の宍道紀代美さんに出席いただきました。

本日はお忙しいところ、本委員会の審査のため御出席いただき、まことにありがとうございます。委員会を代表してお礼申し上げます。

ここで、本委員会の審査状況に関して、御報告いたします。

本陳情は本年8月30日に提出され、9月10日に本委員会へ付託され審査をしてまいりましたが、今回、陳情者の意見等を伺い、審査の参考としたいため、本日お越しいただいたものです。

よろしくお願いいいたします。

それでは、早速ですが、初めに陳情第5号の陳情趣旨について、参考人から説明がありましたらお願いいいたします。

小林参考人

本日はお招きいただきまして、まことにありがとうございます。よろしくお願いいいたします。川内原発1号機、2号機の再稼働に反対し、廃炉を求める陳情についてお話しさせていただきます。

私は、グリーンコープ鹿児島生協の阿久根地域の委員として阿久根市内に住み、組合員活動をしている小林弥生と申します。グリーンコープは家族に安心、安全な食べ物を食べさせたいという思いのお母さんたちが集ってできた共同購入を主体とする生協です。九州、中国、関西、各府県ごとにある14の生協がネットワークを形成しており、全体で40万人の組合員の方がいらっしゃいます。鹿児島県内には2万人、阿久根市内に約120人の組合員の方がいらっしゃいます。私たちはもっと安全でおいしい食べ物を、もっと心豊かな暮らしを、安心して生きられる社会を、緑の地球を緑のままで未来の子供たちに手渡したいという思いや願いを、一つずつ形にしていくなめいいろいろな活動に取り組んできました。例えば、国産農産物を守る取り組みや遺伝子組み換え食品に反対する取り組みなど、直接食べ物に関する運動を行っています。自分と家族の健康は安全な食べ物があってこそという思いがあるからです。また、びん牛乳に代表されるリユースびんのように、なるべく環境に負荷を与えない容器を使うなど、環境を守る取り組みも行っています。

このように家族が、とりわけ、未来を担う子供たちが安心して暮らせる社会にしたいという願いを胸に日々の活動に取り組んでいます。母親である私が、原発再稼働に反対する理由について述べます。

まず第1に、放射能汚染が上げられます。先ほども述べたように、23年前に起こったチェルノブイリ事故では、日本は輸入食品の諸食料の規制を行いました。放出された放射能は8,200キロメートル離れた日本にも飛んできて、シイタケなどの食品を汚染しました。そして、放射能は太平洋を超え、アメリカ大陸を汚染し、そして、再度ヨーロッパを汚染するというように、事故で放出された放射能は全世界に広がりました。国境など、放射能の拡散にとってはまったく意味のないものだったのです。放射能は目に見えず、におわず、感じることでできないもの、その影響は直ちに表れることのないものです。スリーマイル島やチェルノブイリ事故から20年から30年経過した昨今、がん発症率の高さが指摘されています。だからこそ、放射能汚染についても真剣に考え、増設されれば事故の危険性がさらに上がることを認識してほしいのです。また、日常的に微量とはいえ、空気中に放出された放射能は土に降りそそぎ、植物が取り込み、それを食べた草食動物、さらにそれを食べる肉食動物と、次々に濃縮されていきます。直接汚染された農産物はもちろんですが、食物連鎖により濃縮され、その頂点に立つ人間がもっとも放射能の影響を大きく受けることとなります。未来の子供たちに安全な社会を手渡すために、再稼働に絶対反対します。

第2に、東京電力原発事故が発生し、私たちを取り巻く状況、暮らしが大きく一変しました。私は現在妊娠しています。放射能汚染から身を守るためには、放射能を避けるしかありません。我が子を守るためには汚染地域の生産物は食べたくありませんし、食べさせたくもありません。しかし、福島に住む子供たちはすでに内部、外部とも放射性物質に相当程度被爆している可能性が心配されています。また、宮城、岩手など、東日本に住む子供たちは、今も放射能被爆の恐れの中で暮らしています。福島を中心に、東日本に住んできた多くの人々がふるさとを失っています。本当に悲惨なことです。私はこの大好きな阿久根市を離れたくありませんし、同じような悲惨な状況にあう可能性のある原発の再稼働に断固として反対します。何よりふるさとを失いたくありません。

第3に、原発から出される放射性廃棄物の問題や福島の汚染された土の最終処分の問題も無解決のままですが、今、日本には広島原爆の100万発を超える核分裂性物質があるそうです。発電時だけ二酸化炭素を出さないからといって、この死の灰に目をつぶることができません。毒性がなくなるまで何千万年とかかる廃棄物にいったいだれが責任を負えるのでしょうか。地面に埋める計画も盛んに宣伝されていますが、地震の多いこの日本で、未来永劫安全だと言い切れるわけがありません。今さえよければいいというのはまったく無責任な態度です。未来の子供たちに私たちの便利で豊かな生活のつけを回してしまっているのでしょうか。もう一つ、原発から出される温排水の影響もあります。温排水は川内川河口の海産資源にも影響を与えていると言われていています。海の放射能汚染も心配です。増設によってさらに多量の温排水が出されれば、今以上に与えるダメージは深刻です。海はつながっています。ましてや、隣町にある原発のことです。自然豊かで農・海産物に恵まれた阿久根市も大きなダメージを受けることは火を見るより明らかです。原発は悪影響にしかかなり得ません。一人の母親として、もうすぐ生まれてくる大切な命のために陳情事項にあるように、住民の安全を守る一点で一致して、川内原発1号・2号機の再稼働に反対し、廃炉を求める決議をしていただきたいと心から願います。以上です。

総務文教委員長（牟田学委員）

ありがとうございました。

それでは、ただいま説明いただきました陳情第5号について、参考人に対する質疑に入りますが、ここで参考人にお知らせいたします。

参考人は委員からの質疑にお答えいただきますが、参考人から委員に質疑はできませんので、あらかじめ御了承をお願いいたします。

なお、参考人が補助者へ答弁していただく場合は、委員長に補助者から答弁させるとの発言をお願いいたします。

それでは、各委員から質疑がありましたらお願いいたします。

出口徹裕委員

再稼働に反対ということですが、例えば、今の現状としまして、今現在のことであれば、今現在が、例えば今原発が動いてないという状態の中で、これは私が原発がいいとか悪いとかという話ではなくてですね、動いてない中で、電気とかエネルギーですね、そういったものの高騰というのが考えられる一つだと思います。電気代も上がってくるだろうと。その点についてはどのようなお考えをお持ちなのか、とまって、今現在は原発が動くだろうというのか、どうなのかまではちょっとわからないですが、それである程度押さえられてる面があるかと思いますが、これが完全になくなったという状態であれば電気代が上がってくるかというものが、特に主婦の皆さんにとっては光熱費というのは大きな問題だと思いますが、それについてどのような形で考えていらっしゃるのかお聞かせください。

小林参考人

福島原発の事故のあとですね、節電しなければ電力が足りなくなる、足りなくなるというふうなテレビや報道のほうでされていたと思いますが、今現在、その報道はされているでしょうか。現在、足りなくなっているという状況が目に見えてわかるようなところがありますでしょうか。

出口徹裕委員

質問じゃないと受けとって答えますけど、現在のところ、火力発電等使ってますね、電気を起こしていると。私のほうも電気代上がってもしょうがないだろうという思いはありますけれども、実際、陳情で上げられてます市民の皆さんがですね、実際、見えてくる面と見えてこない面があるかと思いますが。電気代のほうも本当は上げないとやっていけないけれどもというところもあるようには聞いておりますが、そういったことまである程度考慮されてですね、上がっても、例えば2倍になってもしょうがないじゃないかというような考えをお持ちなのか、お聞かせください。

小林参考人

家計的に、本当のことをいえば上がらないでほしいという思いはありますが、将来、やっぱり自分の子供たちに安全なものを、安全な暮らしを、そして自分の子孫に、ずっとこの先残っていく子孫に、やはり原発というのはどうもプラスになるかという思いが、どう考えてもしないんですね。なので、やっぱり原発には反対します。以上です。

岩崎健二委員

原発に反対される気持ちというのはよく理解はします。ただ現実問題として、出口副委員長のほうから発言がありましたとおり、化石燃料の発電所を一生懸命稼働させておきまして、CO₂の問題が、値段とともにもう一つ大きな問題があるかと思いますが。CO₂は全地球的な温暖化というのがありますね。だから、そのCO₂の問題を解決しないで、単に原発だけをやめろという話になったときに、どちらをお選びになるのかという大きな問題があるかと思いますが。難しい専門的なものになるかと思いますが、もし補助者の方でもそこらの話ができるんだしたらお願いしたいと思います。

小林参考人

補助者の方をお願いします。

宍道補助者

お話を聞かせていただいてですね、そういった意見というのはかなりあるというのは存じております。しかし、人の命と比べたときに、やっぱり私たちは人として原発と一緒に共存できないだろうというふうに考えてます。それからCO₂の問題を言われたんですけれども、やっぱり日本人の技術というのはどんどんどんどん進んでおきまして、火力発電所の性能も以前の20倍ぐらいに上がっている、最新のものはですね。そういったようなこともお

聞きいたしておりますので、私たちのところはですね、自然エネルギーを利用するということを前提にですね、やっぱりそちらのほうに向かっていくのがいいのではないかとということで、グリーンコープ全体としてもですね、今、ソーラーとかですね、風力発電とか、自然エネルギーというところで電力をつくるというところでですね、今動いているような状況です。今、電力といえば大きな企業が牛耳ってるような状況です。もしも一たん、人間がつくったものですので、原発もですね。絶対ということはないということを東京大学の先生などもおっしゃっておられる方がいらっしゃってですね、川内原発が何かあった場合に、海流は上のほうに上がってくるということで、九州大学の応用力学研究所のところがですね、海流を予測したものを出版しているような状況もありまして、すぐに阿久根市のところにやってくるというのはですね、わかっていることです。第一次産業で鹿児島県全体やってきておりますので、以前、東海村で事故があったときにですね、あちらのほうは干し芋がものすごく特産品になってるんですけども、そちらのほうがですね、東海村の一つの研究所の事故で風評被害で売れなくなって、その被害額は数億円というふうに言われてます。福島の前にもそういうことであるというふうに言われてますし、福島だけでも1兆円以上というような話をしています。お金のことをですね、話をするというのはあるんですけども、やっぱり命をまず大切にするというのが、私たち母親の願いではないかなというふうに考えているしいです。

岩崎健二委員

補助者がおっしゃったお金の問題じゃなくて、CO₂の問題はどうするのか、エネルギーの政策をどうするのか、そういうのを含めたときに何らかのリスクというのはいずれにしてもある。原発にしる、火力発電所にしる、風力にしる、太陽光にしる、値段の問題があつてみたりとか、環境の問題があつたりとか、何らかのリスクはいずれにしてもある。そのよりリスクの少ないものは何かというのを探していかなければいけないんだろうと思っておりますので、そういう意味で、じゃあ原発のリスクの問題とCO₂のリスクの問題と、それから値段の電気代のリスクの問題とを考えると、合わせたうえでやっていかなければいけない問題なんじゃないかなという思いをしておりますので、今、CO₂の問題をちょっとお聞きしたんですが、今の化石燃料の新しくできる発電所は確かににおっしゃるようになりますCO₂対策をされているというふう聞いておりますが、現在は川内の火力発電所も動かしておりますよね。もともととめておいた発電所をやむなくといますか、動かしてやっていると、古い発電所動かしている。いつとまるかわかんような状態だというふうには伺っております。そのような中でCO₂の問題をどのようにお考えなのかというのをちょっとお伺いしたかったということですね。私はそれで結構です。

総務文教委員長（牟田学委員）

ほかにありませんか。

濱之上大成委員

まず、お二人にまず一点は、この陳情に対する思いですけども、生まれたときからの思いですか、それとも、皆さん家族全員が同じ思いでしょうか、まず一点。

小林参考人

物心ついたときからの思いかと言われると、やはりはいそうですとは言いがたいですが、この福島の第一原発の事故のあとですね、自分もやっぱり子供を持つようになってからの思いがやっぱり強くなりました。自分の家族が同じ思いかというのと、やっぱり主人は同じ思いでいてくれていると信じています。

宍道補助者

私はグリーンコープに入るまでこういったようなことは考えたこともありませんでした。ですけども、ふたを開けてみたときに、チェルノブイリの事故があつてですね、大きな被害を受けながら、やっぱりその場で生活せざるをおえないような状況というのを目の当たりにしてですね、やっぱりこれはいけないんじゃないかというふうに考えてます。環境の問題

から言わせていただければ、うちの夫も水産関係で仕事をしておりますので、そういったようなことを考えますと、やっぱり海の汚染の問題とかですね、空気の汚染の問題、土の汚染の問題を考えれば、私たちのところはですね、みんな反対というふうに考えております。高校生の娘がおりますけれども、原発というのはやっぱり天井の火だということで学校でも最近では教わるようになってきたというようなことです。天井の火というのは消すことができない、崩壊熱がずっと出続けますので、福島第一原発のところもですね、ずっと30年間以上ですね、そういったような熱の問題、放射能の問題というのはあと追いつなければいけない。廃棄物になると今度は10万年も、100万年もという話になると気が遠くなるほどのですね、問題がある。そういうふうになったときに、私たちはやっぱりこの場で、この時期にいいよって言ったよということを私たちの子供たち、孫たちに言うことは絶対にできないと思います。以上です。

濱之上大成委員

いろいろ答弁していただいて。まず、私は基本的に危険だということはほとんどの方が一緒だと思ってます。それと、今こうしていつも陳情出るんですけども、福島が事故があっておわかりでしょうというところは、僕はおかしいと思ってます。川内原発ができた時点で危険なんです。テロ攻撃やられたら一発なんですよ。そこまでわかったうえでも私たちはどうしてこうなったんだろうということ。それから、福島で使用済み燃料が今大変ですね、移動は。そうしたときに、今、川内原発の使用済み燃料はプールに入ってます。これを動かそうという思いはおありですか。同じ建屋にあるのが危険だと思いますか。それだけ。

[発言する者あり]

総務文教委員長（牟田学委員）

もう一度。

濱之上大成委員

使用済み燃料ってありますよね。それを、プールの中に入っているわけです。今、福島も同じ建屋の中にあって今危険なんですよ。私は個人的に申し上げますと、今の川内原発が同じ建屋じゃなくて、別棟のところにおくべきだろうというような個人的考えなんですけど、そういったところもお考えですか。

小林参考人

補助者の方をお願いします。

宍道補助者

場所の問題は非常にあるというふうに考えてます。中にあることもそうですし、非常に言われてることがですね、本当にそうだなというふうに思います。テロでやられたら一発だということを言われてますが、本当にそのとおりでありまして、ずっと以前より私どものほうはいろんなところでですね、主張してまいったんですけれども、なかなかそうふうにはならないジレンマというのがありまして、そういった中でですね、やっぱり声を出し続けていくことが大事だというふうにしてやってきております。燃料棒のお話ですよ、使用済みの。そちらのほうは別なところに移すべきだというのは、それはそうだというふうに私は考えておりますが、専門家でない以上ですね、どこにどういうふうに置くかということについてはなかなか申し上げることができないような状況にあります。

濱之上大成委員

単純に質問します。その燃料棒にしても、中間処理施設がどこに持っていけばいいのか。あるいは廃炉にした場合に、最終処理はどうするかをお考えかを簡単に教えてください。どうされるおつもりです。どういうお考えを持っていますか。最終処理はどうするつもりですか。

宍道補助者

最終処理については、今後私たちのところで考えていかななくてはならないというふうには思っている問題ではありますが、そこをどのようにですね、やっていくかというのは本当に難しい問題だと思います。それはなぜかという、日本が地震大国だからです。その中で、

地震が起きたらですね、そういうふうな使用済み核燃料を安全に10万年も100万年も置いておくところがどこにあるかという状況を考えたらですね、これ以上の核のですね、廃棄物というのをふやさないことというのをどういうふうに考えていくかというのが大事なんじゃないかなろうかと。ものすごく都合のいい考え方もかもしれませんが、日本の研究者は非常に優秀だと私は思っております。そちらのほうに、言ってみたら力を投入してですね、そういったことに研究の力を割いていただく。そして、将来的にはそういったところの処理まで考えられるような研究をしていただくのが一番いいんじゃないかなというふうに思っております。大隅のところにも話がありましたけれども、それも結局地層がよく割れやすいというところですね、最終処分場を持っていこうとか、あと甕島にとか、そういう話もあったと聞いております。そういうふうなことを聞けばですね、本当に私たちの身近にそういう問題が、本当に転がっているということですね。自覚しているというのはそこです。

[発言する者あり]

濱之上大成委員

今、甕島にとか、大隅とか、じゃあ自分の近くになればいいというとらえ方でいいんですか。簡単でいいですよ。僕の今の質問に答えてください。自分のところになればいいという答えですか。

宍道補助者

いえ、そうではありません。そういうふうな話が国のほうでは持ち上がっているということを知ったということです。

濱之上大成委員

私は同じ共通した気持ちだなというのはわかりました。ただ問題は、現時点で廃炉にしてもその処理施設が国全体で今からたたかわないかん状況だということはわかってますよね。私どもも再稼働するにしても、稼働しないにしても、結局危険だということだけは共通認識なんです。しかし、私たちのこの程度で賛成、反対が非常に難しい状況であるということはおわかりですか、イエスかノーでいいです。

宍道補助者

お答えについて非常に難しい状況であるというのは理解はしております。

濱之上大成委員

単純に申し上げます。今、川内原発になりますよね。せめて最終処理施設がないとすれば、中間処理施設は川内につくるべきだというふうにお思いですか、どうですか。川内にあるんです。川内は使ってるんです。川内で。となりの私たちは被害者になるかもしれないんですよ。やっている以上はどこのごみに捨てようとかという思いじゃなくて、自分たちが出したごみは自分たちで処理するべきだという気迫はあったほうがいいと思うんですけれども、それに賛成ですか、反対ですか。

宍道補助者

それについては答えを持ちあわせておりません。

濱之上大成委員

わかりました。要するに危険だということは共通であるということは理解しました。私たちも危険だということはわかってるんです。賛成とか反対とかいう状況でよく皆さんからよく御意見を聞くだけでも、やはり自分たちが中間処理にしても、最終処理にしてもどうすればいいんだろうというのは共通課題なんです。そのことだけはわかったうえで私たちは決定をどうするかも理解して欲しいと思ひまして質問しただけです。以上です。

総務文教委員長（牟田学委員）

ほかにありませんか。

牛之濱由美委員

今、濱之上委員から本当に原子力は危険だということを皆さん重々、日本国民全員承知のうえです、確かに。そしていろんな問題が発生した場合にですね、私たちの立場としましても

どちらの意見も聞くというような形をとって、いろんな決定をしていくわけですが、ここでお伺いいたします。先ほどの説明で、今現在、阿久根のほうには120名ほどのコープの会員の方がいらっしゃるとお聞きしました。川内の原子力発電所においても、福島事故以来、国の要請により安全対策をいろいろ行っている状況です。説明会も何度も開いております。そのような場所に、直接安全対策のそういうのを見学に行かれた経緯があるか。また、何名ほど安全対策の説明とか、見学ですね、行かれているか教えていただければ。

小林参考人

その点については補助者の方にお話いただきます。

宍道補助者

安全対策のところへ向かっているか、向かっていないかですね、参加しているかどうかの話ですよね。地域のところに話があった場合はですね、グリーンコープの組合員でおられる方がですね、行かれている場合もあります。そちらに関してはですね。川内のほうにも組合員がおりますので、そちらのほうもですね、活発に動いておりますので行ってるような状況もあります。そちらのほうにですね。

牛之濱由美委員

今、説明いただいた補助者の宍道さんは実際中に入って見学されたことはありますか。

宍道補助者

以前のですね、3号機の増設のところの話に関しては、川内のところで説明があったので聞きにまいったことはあります。

牛之濱由美委員

それでは、今さまざまな安全対策をされている中ですが、実際、その中にですね、入ってはいらっしゃらないということですね、だれも。原子力発電所内に入って、そういう安全対策のそのような説明等とか、見学等もされていないという状況ですね。

総務文教委員長（牟田学委員）

なるべく参考人に質問はお願いいたします、参考人に。

牛之濱由美委員

行ってらっしゃらない。

小林参考人

大人になってから行ったか、ここ数年で行ったかと言われると、はいとは答えがたいんですが、小さなときから学校の研修などで何度も行かせていただいています。

牛之濱由美委員

それはたぶん展示館のほうではないのかなと思います。展示館ではなくて中のほうに、要望したらどんどん今入れて見学をさせていただきます。だから、どちらのやっぱり意見も聞くという自分たち役目もありますので、全議員行って、そのような説明も受けさせていただいています。また、そういう原子力側の説明もしっかり聞いていただきたいという、そのような思いもあつての質問でした。終わります。

総務文教委員長（牟田学委員）

よろしいですか。

ほかにありませんか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

なければ陳情第5号についての審査を一時中止いたします。

ここで、暫時休憩いたします。

(休憩 10:55 ~ 11:03)

総務文教委員長（牟田学委員）

休憩前に引き続き委員会を再開いたします。

次に陳情第6号についてであります。陳情趣旨について説明がありましたらお願いをいたします。

小林参考人

川内原発3号機増設白紙撤回を求める陳情についてアピールさせていただきます。2009年度に九州電力が川内原発3号機増設の申し入れを鹿児島県と薩摩川内市に行ったことを受け、私たちは第34回通常総代会で川内原発3号機増設反対に関する特別決議を提案し、採択されました。その後、鹿児島県知事は東京電力福島第一原子力発電所事故で、政府の脱原発政策への方向転換と世論の不安をかんがみ、川内原発3号機増設を凍結宣言しました。なぜ白紙撤回ではなく凍結なのでしょう。なぜ人口も減少しつつある鹿児島に3つ目の原発が必要なのでしょう。安全性が確保されているのであれば、なぜ人口密集地に原発をつくらぬのでしょうか。

一つ目の白紙撤回とは、いつでも施行できるように、その言葉のとおりいつでも解凍し、施行しようとする可能性を限りなく含んだ県民を煙にまこうとする都合のよい言葉のように感じています。県民の財産と健康を守ることを第一の公務とするべき県知事であれば、即座に白紙撤回すべきであると思います。

2つ目に、なぜ鹿児島に3つ目の原発をつくらうとしているのでしょうか。国は原発を建てなければ電気は足りず、国民生活に大きな影響があると言っていました。現在、一つも稼働していなくても生活は不自由なくできています。私たちは国の情報をどのように信じればよいのかわからなくなってきました。この疑問は、3つ目の安全性が確保されているのであれば、なぜ、人口密集地に原発をつくらぬのかということに大きくかかわっていると思います。人口密集地ではウランを燃やせないからです。原発はウランを原料としています。ウランを燃やせば長崎の原爆がそうであったように、莫大な放射能が出てしまうからです。3号機は出力が100万キロワットと想定されていました。100万キロワットとは原子力発電所1機が1年動くごとに、広島、長崎の原爆で生み出した死の灰が千倍という放射能が生み出されるとんでもない原発です。そんなものがもし環境に漏れ出してくるようなことになったら、人口密集地では大きな被害が出ます。私たち自身の命はどうでもよいのでしょうか。今、福島の原子力発電所の周辺の住民約10万人の人たちは、万一のことを考え、避難所に行けと言われて行ったが最後、チェルノブイリ同様に家に帰れないという状況になっています。原子力を推進する人たちは、事故が起きればこうなることはもちろん知っていたのです。だから都会には建てないことにしたのです。そのために原子炉立地審査指針という法律までつくりました。その中に、原子炉敷地は人口密集地帯からある距離だけ離れていることとあります。ある距離とはどのくらいの距離なのでしょう。だから薩摩川内市、つまり人口密集地ではない場所として選ばれたのです。強制的に命を差し出しているのと同じではないかと憤りを感じています。東京電力福島第一原子力発電所の事故、こんな事故を起こしてしまった大人として私たちはどう生きればいいのか。そのことを問われていると思います。第一に子供を被爆から守らなければなりません。子供には原子力を選んだという責任がありません。私は積極的に原子力を推進してきたわけでもありませんが、それでも大人として、一人の母親として責任があると思っています。だから、いつ解凍されるかわからない3号機増設をはっきりと撤回してほしいのです。恐ろしいことに、薩摩川内市の地図に福島の地図を同じ縮尺で重ねてみると、川内から南方の屋久島、種子島まで汚染が広がることがわかります。一度事故が起こればそうなってしまうし、私たちが住んでいる阿久根市も同様に猛烈な汚染で強制避難を余儀なくされてしまうことは必至です。どうか、原発を超える社会に、真の意味で豊かな生活と地域の創造に近づくように、緑の地球を緑のまま未来の子供たちに手渡せるのか、今、私たちの決断次第なのだと言っています。鹿児島にもさまざまな方がいらっしゃいます。再稼働や増設賛成の方は、一時的な特需や今後の景気回復を見込まれているようですが、今までのような高度経済成長期の大量生産、大量消費の時代は終わりを迎えているかと感じます。日本の自動販売機の電力使用量は原発1機分の発電

量に相当するそうですが、環境先進国のスイスにはほとんど自動販売機はありません。これからは地球温暖化防止の観点からも電力使用量を減らすべきだし、高齢化社会にともなって減っていくことは確実です。日本国内の生産・製造メーカーはコストダウンのために海外に事業拠点を移すなど、日本離れが進んでいることも事実です。このような状況下での原発増設は無意味で、原子力発電所から出される放射能廃棄物の問題を考えても、原子力からの脱却の時期にきているのではないのでしょうか。原発に頼らないまちづくりで注目を浴びている岩手県花巻市のように、私の住む阿久根市が緑豊かで、子供から高齢者が安全に生活して暮らしていけるまちであって欲しいと思います。議員の方々にも御家族がいらっしゃると思いますが、これからもこれからの人たちの将来を考えて、ぜひ良識的な判断をお願いしたいと考えております。以上です。

総務文教委員長（牟田学委員）

はい、ありがとうございます。

それでは、ただいま説明いただきました陳情第6号について、質疑に入ります。

ありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

なければ、陳情第6号についての審査を一時中止します。

次に、陳情第7号について、陳情趣旨について、説明がありましたらお願いいたします。

小林参考人

原子力発電推進から脱却し、原子力に依存しない自然エネルギー政策に転換を求める陳情について発表します。

遺伝子組みかえ食品は御存じでしょうか。遺伝子組みかえとは自然界の摂理に反するもので、ある生き物の特定の遺伝子を取り出し、新しい生き物を生み出す技術です。品種改良とは根本的に異なり、自然にはない未知のものをつくり出すとんでもないものです。この遺伝子組みかえされたものが大量に食品として出回っています。世界で一番食べているのも日本人です。これは日本の緩やかな法規制により大量に輸入されてしまっているからです。しかも、表示制度までも緩やかなため、私たちが選択する権利さえ奪われています。命を差し出しているのと同じだと考えます。原発の問題もこのことと同じ状態だと言えます。1986年に起きたチェルノブイリ原発の事故では、莫大な被害が出ました。国境を越えた放射能は大地に降りそそぎ、食べ物を汚染しました。日本は汚染食が国内に入らないように輸入食料の規制を行いました。本州の6割にもわたる面積が放射線管理区域に指定され、多くの人々がふるさとを離れなければならなくなりました。このような状況を受けて、人類は原発とは共存できない、安心・安全な食べ物はクリーンな環境のもとでしか得られないと、私たちの先輩の母親たちは強く思ったのです。そこで、1989年にグリーンコープを結成したときから脱原発の方針を掲げ、運動を展開し、放射能測定を開始しました。93年の1月より機関紙「共生の時代」に測定結果の掲載を開始しています。2011年3月11日の東日本大震災によって、私たちが一番恐れていた東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生し、私たちを取り巻く状況、暮らしは一変しました。この事態等を受けて、グリーンコープが供給する取扱商品の放射能汚染について自主検査を行い、その情報を公開し、2011年10月からはグリーンコープ内に放射能測定室を設置し、放射能測定の体制を強化しましたが、放射能測定をしなければ食べ物を食べられない状況があつてよいのでしょうか。そのような状況が安心して暮らせる状況と言えるのでしょうか。しかし、私たちは反対だけを訴えるのではなく、自分たちにできることをと考へ、進めることを決議しました。2011年6月20日、グリーンコープ共同体第6期通常総会で、グリーンコープは市民の手で風力などの発電所をつくり、不転退の決意で脱原発に向かいますということを確認し、10月29日、グリーンコープの脱原発政策の実現に向けて、自然エネルギーによる市民電力事業を推進していく事業主体として、一般財団法人グリーンコープ市民電力を設立しました。これまで私たちはエネルギーの問題を初め、人間の生活と経済と金融という意味で大切な問題はすべて国や東京

電力などの業界に任せてきました。もちろん、国や東京電力などの業界にエネルギーや経済や金融などの問題のすべてを委ね、そのとらざるところを指摘するだけであったことが今回のような事態を招く一因ともなってきたと考えています。その反省に当たって、私たち市民も子供たちの命を守るために共助の仕組みを生み出し、エネルギーや経済や金融の問題についても応分の責任を負っていこうと考えました。具体的には、1 原発はいけないし、なくさなくてはいけない。2 そのために市民と市民の連帯が電力などの問題の解決の主体の一人として立ち上がる必要がある。3 具体的にはグリーンコープは市民と市民の連帯を表す一人として、電力問題の解決のその先頭に立っていくことを決意しました。そうしていくことが唯一、私たちが脱原発に向かうことができる具体的かつ現実的な道を意味しているのだと考えたからです。ことし6月に開催した総代会では、市民発電所の建設を進めていくためにグリーン電力出資金に関する決議を行い、すでに福岡県糸島市に第1号となるメガソーラー発電所を建設し、売電が始まっています。鹿児島でも設置の検討が進んでいます。この具体的な一歩をグリーンコープの組合員、母親が立ち上がり、力強く踏み出したいと考えました。今回のような陳情書を提出しましたのも、皆さんの力で政治を変え、今こそ原子力推進から脱却し、再生可能エネルギーや自然エネルギーを利用した小規模発電に切りかえていきたいと考えているからです。陳情事項にありますように、原子力発電推進から脱却し、原子力に依存しない自然エネルギー政策に転換することを決議し、原子力に依存しない自然エネルギー政策に転換することを意見書として鹿児島県に要請することをぜひ決議していただきたいと思います。以上です。

総務文教委員長（牟田学委員）

はい、ありがとうございました。

それでは、ただいま説明いただきました陳情第7号について、質疑に入ります。

出口徹裕委員

陳情書、三つ目、第7号までいきましたけれども、基本的に電気、この共通するところ、7号に関してなんですが、共通して7号を中心に共通して話したいと思いますが、電気を使うから原発があるというのが観点なんですが、参考人の方、陳情をまとめてだとは思いますが、個人として、例えば、今までの生活と違って事故以来何らか節電をこういうふうに取り組んでますよ、全体としてもこういうふうにやっていきましょうねというようなものに、現実取り組んでらっしゃいますか。太陽光発電をすとか、しないとかは別としてですよ。何か、節電に対してこのように対してやっていきたいとか、やってますというのがありますか。ね。

小林参考人

我が家ではですね、電気を必要な箇所以外つけないという暗い生活を行っております。リビングしかついてない我が家、家に帰ってきても玄関の電気もついてない我が家を今ずっと行っております。主人を迎えるときに電気がついていない玄関、ちょっと心苦しいところもありますが、それでも大丈夫だよと言ってくれる主人がいますので。ありがとうございます。

総務文教委員長（牟田学委員）

ほかにありませんか。

岩崎健二委員

確かに原子力から自然エネルギーというのは、国も今一生懸命進めている方向だと考えております。ただ、陳情をみると直ちにやめてという文言があちこちに入っておりますよね。直ちにやめたときにどうなるのかということが出てくるかと思えます。私なんかも、先ほどから各委員からも話がありましたとおり、原発が決していいとは思っておりません。ただ、現実に今どうなのかということいろいろ悩んでいるわけなんですね。皆さんそうだと思います。だから、出口委員がちょっと話がありました、電気代が仮に倍になってもいいのか。電気代が倍になってもいいので原子力をやめて自然エネルギーに変えていって欲しいという覚悟があるのか、お聞かせください。

小林参考人

厳に家計は苦しくなりますが、自分の守りたいものを、やはり子供たちですね。自分が母親になってからやっぱり切に思うことです。やはり子供たちに将来この負担を背負わせたらいけないと考えておりますので、今決議していただきたいと考えております。

岩崎健二委員

お金がどうしてもかかることなので、自然エネルギーというのはかかることなので、そうしたときに皆さんの決断が倍になってもいいからやめてほしいという、そういう心づもりがあるのか。倍になるかどうかはわかりませんよ。わからないんだけど、なっても仕方ないのでやって欲しいという強い意向があるかないか、そこのところをお聞かせいただきたい。

小林参考人

私個人でよろしいでしょうか。あります。

岩崎健二委員

ありますね、わかりました。

それとですね、自然エネルギー、いわゆる風力、水力、今言う太陽光、非常に発電効率が悪いということも御存じですよ。太陽光だったら夜は発電しない、雨、曇り、発電しないという不安定な電気のものであるという。じゃあそれをどう補っていくかというのがあろうかと思えますね。水力でまかなったり、いろんな地熱でまかなったりということがあろうかと思えますが、いずれにしても非常に金のかかる発電になるのは事実ですね。だから、そこらを皆さんがお金は幾らかかっても仕方ないので安全が第一だとおっしゃるといふ決断が、国民の皆さんがそういうことであればですね、これは幾らでも進められることができると思いますので、その決意のほどをぜひ今後のグリーンコープで決議される場合でもですね、自分たちはただただやめろやめろというだけじゃないんだよと、やめたときの自分たちにかかってくるものを受ける覚悟はあるんだということをぜひ決議していただければ、私なんかも非常に進めやすいんじゃないかなと思います。そこのところはいかがですか。ありますと言ってくれませんか。

小林参考人

はい、あります。

総務文教委員長（牟田学委員）

ほかにありませんか。

木下孝行委員

一点だけ確認をさせていただきたいんですけども、3陳情を見て共通するのは、即刻再稼働を断念してですね、原発政策から撤退をするというような感じですよ。そういう中でですね、福島原発が非常に全面的に問題視されて出ております。しかし、東北の一番震源に近い宮城県沖のですね、一番近いところに女川原発というのがありましてですね、女川原発は川内市と同じ立地条件のところがありまして、標高が、大体高さ13メートルくらいのところであって、浸水防止で15メートルまでは水がこないというような形で、今回、震災のときもですね、多少の水の浸水はして、多少の被害はあったんですけども電源も喪失しなくてですね、確保された原発なんですよ。だから、そういった中でですね、川内の原発、先ほど牛之濱委員からありましたように、同じような立地条件にあるわけですよ。そして、環境というのか、いわゆる震源のものが西海岸という、九州の西海岸というのは大きな震源に当たるようなプレートもないし、多少の地震は過去にもあります。だから、川内の場合は震度6ぐらいを想定しております。しかし、明らかに環境が違うんですよ。そういった中で、今、国が安全な原子炉を再稼働させるために、今、安全委員会のほうで審査してますよね。そういった中で、確実に安全だというふうな施設があった場合、それでも認めないという強い意志なのか。そういうところが確実に安全であれば、その期間ですよ、耐久の期間、施設があと15年とか20年とか、一応基本40年というのが施設の耐用年数ですよ、基本的に原発というのは。その残りの年数をそれは再稼働してもいいのかなというように思い

があるのか。それとも、やっぱりそういう安全が確保された施設であってももうだめなのかというのは、そこはどう思っていますか。

小林参考人

安全が100%という保証があるならば、なぜ原発を東京都庁の下に建てないんでしょうかという、やっぱりそういう思いからですね、原発をつくる時点から原発には何か被害があったときに甚大な被害が出るであろうという憶測がされたうえで建てられた建物なので、それに対してお答えすることはちょっとできません。

[発言する者あり]

山田勝委員

私はもう十分わかります。ですから、基本的にですね、原発は反対ですよ。今後は増設は認められないですよ。ただ、なくならせるためのどういうプロセスかというのが一番大事ですよ、やはりね。例えば、産業を起こすために原発が必要だ、産業を起こさなければ所得もふえない。だから、冷え込んでもいいよって、どうでもいいよって言ったって、今度は、例えば先ほどお金を2倍でも払いますよって言ったとしても、給料が下がったらどうするのよっていう部分もあるでしょう。非常に難しいんだけど、私個人的には賛成ですよ、最後のこれなんかはそれでいいと思いますよ。ただ、直ちになくせというのについてはね、ちょっと胸が痛いですよ。直ちになくせというのについてはちょっと胸が痛いんですよ。代替エネルギーがちゃんとされればね、僕はいいと思いますよ。でも、あなた方が言われるように、ずっと日本中稼働していなくてもいいじゃないですか。稼働していなくてもちゃんと電気はあるじゃないですかって、そういう部分もありますよ。ところが、一方の面から見ればですね、非常に産業を起こすほうにブレーキがかかっているという部分もあるので、なかなか難しいと思います。でも、あなた方みたいに絶対反対という人もおっているんですよ。だから、それで大体バランスがとれていくんですから、私はもうそれで十分です。本当にきょうはよくわかりました。ありがとうございました。

総務文教委員長（牟田学委員）

ないですか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

なければ、陳情第7号についての審査を一時中止します。

以上で、参考人に対する意見聴取を終わります。

それでは、ここで委員会を代表してお礼を申し上げます。

本日はお忙しい中にもかかわらず、本委員会に御出席いただきありがとうございました。本日、お聞きいたしました意見は審査に有効に活用させていただきますので、なにとぞよろしく願いいたします。

本日はありがとうございました。

(参考人、補助者及び傍聴者 退室)

参考人への意見聴取が終了いたしました。

ここで、陳情第5号から陳情第8号までの4件を一括議題とし、委員の意見をお伺います。

木下孝行委員

5号から7号までの陳情者の意見を聞きました。きょう審議、この協議をする必要は私はないと思います。この問題に関しては、今後、流動的でいろんな状況が変わってくる状況がありますので、のちから協議をするべきだろうと思っております。

[「異議なし」と呼ぶ者あり]

[「継続してください」と呼ぶ者あり]

総務文教委員長（牟田学委員）

ここでお諮りいたします。

本日の委員会の審査はこの程度にとどめ、散会いたしたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

御異議なしと認めます。
よって、本日はこれにて散会いたします

(閉 会 11時30分)

総務文教委員会委員長 牟 田 学